



A bride who gets married to vampire

# 吸血鬼の花嫁

— ヴァンプドールのはなよめ —

*A bride who gets married to vampire*

## DRAMA CD

Saku Takano Presents  
*A bride who gets married to vampire*

＜ドラマCD アフレコ台本＞

【非売品】



A bride who gets married to vampire

吸血  
鬼  
ヴァン  
プ  
ド  
ー  
ル

# 吸血鬼の花嫁

— ヴァンプドールのはなよめ —

*A bride who gets married to vampire*

## DRAMA CD

*Saku Takano Presents  
A bride who gets married to vampire*

〈ドラマCD アフレコ台本〉

非売品

本書は、ドラマCD「吸血鬼の花嫁―ヴァンプドールのはなよめ―」の縮刷台本となります。

原作・脚本 嵩乃朔

音響監督 児玉拓己

音楽 羽鳥風画

制作 株式会社ボイス・ビュー

# 吸血鬼の花嫁

— ヴァンプドールのはなよめ —

A bride who gets married to vampire

## DRAMA CD

Saku Takano Presents  
A bride who gets married to vampire

〈ドラマCD アフレコ台本〉

■吸血鬼の花嫁—ヴァンプドールのはなよめ— ボイスドラマ

### 【登場人物】

篠蔵蒼緒<sup>しのくらあお</sup>.. 相坂優歌<sup>ささ</sup>さま

・ 17歳。軍人。衣路<sup>いぶき</sup>の「花嫁」。

・ 明るく笑顔が絶えない。衣路に恋心を抱くが伝えられず、自分より衣路を優先してしまい、つい尽くしてしまう。

二ノ宮衣路<sup>にのみやいぶき</sup>.. 湯浅かえで<sup>かえで</sup>さま

・ 16歳。軍人。ヴァンプドール。

・ 戦闘能力が高く、軍人として非常に優秀だが、吸血鬼なのに吸血が苦手。そのためお腹を空かせがち。生真面目でにぶい。蒼緒の恋心には気づいていない。でも蒼緒のことは親友として花嫁として大事にしたいと思っている。

花總雪音<sup>はなふさゆきね</sup>.. 田辺留依<sup>るい</sup>さま

・ 19歳。軍人。ヴァンプドール。紗凧の恋人。

・ 元お嬢様。自信家で世間知らずなところがあるものの、衣路と並んで戦闘能力は高い。天才肌だがそれ以上に努力家でもある。有言実行タイプ。基本、品の良いお姉さまタイプだが、好きな子ほどついいいじめてしまう。紗凧にベタ惚れ。

白藤紗凧<sup>しらふじさな</sup>.. 大野柚布子<sup>柚布子</sup>さま

・ 18歳。軍人。雪音の「花嫁」であり恋人。

・ 僕っ子（女の子）。内気で他人が苦手で、どもりがち。でも親しい間柄では自分が出せる。いざという時は、意外と肝が座っているが普段は流されがち。唯一雪音を御すことができる。



## 【世界観および主な用語】

・「吸血鬼×軍服×百合」をコンセプトにした吸血鬼百合作品。

・時代 …明治後期～昭和初期あたりの和洋折衷な雰囲気の世界。

・ヴァンプドール…吸血餓。いわゆる吸血鬼。ウエアウルフと呼ばれる化物を退治する軍人。「花荊」と呼ばれる、吸血のためのパートナーがいる。

・ウエアウルフ…狼餓。いわゆる狼男。象くらしいの大きさの狼の化け物。

・はなよめ…花荊。脚本中では読みやすさ優先のため「花嫁」の字にしています。ヴァンプドールが吸血するための少女。パートナー。ヴァンプドールと花嫁で恋人として付き合っていたり、付き合っていない場合もあったり。

## 【あらすじ】

・蒼緒はヴァンプドールである衣路の花嫁。けれど衣路はヴァンプドールのくせに、吸血が苦手。その理由は花嫁が幼馴染みの蒼緒であるため照れくさく、また吸血行為自体が恥ずかしいため。なおかつ、吸血は痛みをとまなうため、蒼緒を痛がらせたくない。この間も吸血に失敗してしまい、もう三日も吸血しておらず、はらべこのせいで退治すべきウエアウルフの反撃を受けてしまった。

・助けに入った同僚の雪音のおかげで事なきを得たが、雪音に「恥ずかしがらずに今すぐに吸血しなさい」と説教されたものの、すつたもんだしつともやはり恥ずかしくて吸血できずじまい。

・仕方なしに、衣路は同じくヴァンプドールの雪音に再度相談。痛がらせないためには、気持ちよくしてあげてから吸血すればいいとアドバイスを受けるも、純情な衣路にはハードルが高い。なおかつ、雪音とその花嫁の紗凧は恋人関係にあるが、衣路と蒼緒は親友同士。親友への真摯な思いと、胸に去来する名言化できぬ思いに、戸惑う衣路。

・一方の蒼緒は、雪音の花嫁である紗凧に相談を持ちかける。雪音と紗凧は恋人同士であるが、蒼緒は衣路に淡い恋心を抱くものの、衣路にとっては親友でしかないことを理解しているため、自分の気持ちを押して殺して思い悩む。とにかくお腹を空かせている衣路のため、どうにか吸血する方法はないかとアドバイスを乞う。

・お互いの相談の結果、キスしてから吸血することに。蒼緒は、衣路が望まないならキスしたくないと言うが、衣路は蒼緒に痛い思いをさせなくて済むのなら、したいと言う。キスをして吸血をする二人。

・翌日、衣路は蒼緒に「ヴァンプドールと花嫁は、命を預けあつて、命を与えるからこそ、ふたりだけの特別な絆がある。そういう絆を築きたい。だからこれからも花嫁でいてほしい」と告げる。嬉しく思う蒼緒。けれど衣路の言う特別と自分の思う特別とは違うのだと、理解していた。

1 ■吸血鬼の花嫁―ヴァンブドールのはなよめ― ボイスドラマ

2 ■第一話

3 ■木立の立ち並ぶ林。(夜)

4  
5  
6  
7 狼 餓  
8 グオオオオオ！(狼 餓の唸り声。狼が巨大化したような化け物)

9 バキバキメキメキ木を薙ぎ払いながら迫って来る。

10  
11 衣 路  
12 「(冷静に)ふん、図体ばかりでかい雑魚が」

13 衣 路、銃を構えて、ドドドドドと5.56mm弾のオート射撃。(アサ  
14 ルトライフル)全弾ヒット。

15  
16 狼 餓  
17 グギヤア！(狼 餓の悲鳴。足止めを食らう)

18 衣 路  
19 「ト・ド・メ・だあっ！」

20 走り寄りながら、上段に構えた日本刀を抜き、振り下ろす衣 路。  
21 が、キインと爪で弾かれる。

22  
23 衣 路  
24 「なっ!!」

25 狼 餓  
26 グオオオオオオ！

27 狼 餓の反撃。パンチで吹っ飛ばされる衣 路。

28  
29 衣 路  
30 「ぐあああっ！」

1

31 木に背中を打ち付ける衣 路。

32 迫りくる狼 餓。

33  
34 衣 路  
35 「ぐっ！(痛みに耐えながら)しまっ…」

36 その時、左後方から援護が。

37  
38 雪 音  
39 「あーら、油断大敵よ、衣 路。…はあっ！(跳躍)」

40 衣 路  
41 「おまえは…！」

42 ヒュヒュヒュンと、素早く日本刀で攻撃。

43 狼 餓  
44 グギヤアアア！

45 紗 風  
46 「先輩！ 援護します！」(今度は右後方から)

47 紗 風による9mm弾のオート射撃。(サブマシンガン)

48  
49 狼 餓  
50 ギヤアアア！

51 瀕死の狼 餓。

52 SE 日本刀を構える音。

53  
54 雪 音  
55 「…しつこい人は嫌われるわよ。さっさとお逝きなさい！ はああ  
56 あー！」(トドメ)

57 雪音の一閃で狼 餓、斬られる。メキメキと木が倒れる音とともに、  
58 ズシンと化け物が倒れる(カバとか大きな獣が倒れるくらいの大  
59 さ)

60 化け物が蒸発。

2



「ふふ」

SE 納刀の金属音。

「雪音……。すまん。助かった」

雪音、こちらに近づきながら。

「サルも木から落ちる…、衣路ともあろう人がウェアウルフに反撃されるなんて、ね」(衣路の手を取ってひっぱりあげる)

「っ、ありがとう、雪音。…って、人をサル呼ばわりするなよ」

「あら、我が帝国陸軍特務機攻部隊・ストレイ・ドッグ・カーネイジのエース・二ノ宮衣路でも珍しい事もあるものねと驚いているのよ。…まあ、真のエースはこの私、花總雪音だけだよ」

「はいはー」

ガサガサと腰高くらいの草の葉ずれの音。

「衣路ちゃん、大丈夫だっ…、って、あれ、雪音さん？」

「お疲れ様、衣路ちゃん、蒼緒ちゃん、それから先輩も」

「って、紗凧ちゃん!?」

「えへへ。こんには…っていうかもう夜だから、こんばんは、だね、蒼緒ちゃん」

「(嬉しそうに) うわあ! こんばんはだよー! こんな所でどうしたのお?」

「ふふ、帰投中、たまたま通りがかってね、ちよっとだけ衣路に手を貸してたの」

「いや、雪音が助けてくれて、本当に助かった。ありがとう。なんたつてうちの花嫁さまは戦闘はからつきしだからな」

91 蒼緒

「えへへ。面目ない…」

92 雪音

「いいのよ。仲間同士助け合わなきゃ。…それにしても衣路がウェアウルフを仕留めそこなうなんて珍しいわね。ま、この件は貸しにしておくからいいけど」

93 衣路

「うぐ…。助け合うんじゃないのかよ」

94 雪音

「無償労働はしない主義なの。…で、何かあったの? 衣路?」

95 衣路

「いや、あの…まあ…いろいろあつて、な」(バツが悪くてごにょごにょ潤す衣路)

96 蒼緒

「あはは…」

97 雪音

「…」

98 蒼緒

「た、立ち話もなんだし、ちよっと移動して話そっか」

■林、少し開けた場所。(夜)

SE ふくろうとかの鳴き声。

104 蒼緒

「えっと、このあたりでいいかな?」

105 紗凧

「だね。座れそうな切り株もあるし」

106 雪音

「それで、一体どうしたっていうのかしら」

107 衣路

「う…」

108 蒼緒

「えっと、ご紹介が遅れましたが、この人たちは私たちの同僚さん、ヴァンプドールの花總雪音さんと、その花嫁さんの白藤紗凧ちゃん。

109 衣路

衣路ちゃんもおつても強いヴァンプドールなんだけど、雪音さんもおつても強いんです。私たちより早くから特務機攻部隊いる、頼りになる先輩さんたちです」

110 蒼緒

「あ! さらにご紹介が遅れましたが、私たちのお仕事はウェアウルフと呼ばれる、人を食べちゃう異形のモノたちを退治する事で

111 蒼緒

…つまり、対ウェアウルフ部隊の軍人さんです。私の名前は篠蔵蒼緒。あつちでむすつとした、むずかしい顔をして

112 蒼緒

…つまり、対ウェアウルフ部隊の軍人さんです。私の名前は篠蔵蒼緒。あつちでむすつとした、むずかしい顔をして

113 蒼緒

…つまり、対ウェアウルフ部隊の軍人さんです。私の名前は篠蔵蒼緒。あつちでむすつとした、むずかしい顔をして

114 蒼緒

…つまり、対ウェアウルフ部隊の軍人さんです。私の名前は篠蔵蒼緒。あつちでむすつとした、むずかしい顔をして

115 蒼緒

…つまり、対ウェアウルフ部隊の軍人さんです。私の名前は篠蔵蒼緒。あつちでむすつとした、むずかしい顔をして



121 いるのが二ノ宮衣路ちゃん。衣路ちゃんもヴァンプドールと呼ばれる  
122 吸血鬼さんです。

123 ウェアウルフはめっちゃ強いので普通の人間では歯が立ちませ  
124 ん。そこで我々、帝国陸軍特務機攻部隊・通称ストレイ・ドッグ・  
125 カーネイジの登場です。私たちは通常、2人1組での行動が義務づ  
126 けられています。それはヴァンプドールが人間の女の子の血を吸わ  
127 なければ生きていけないからで、一人のヴァンプドールに対し、一  
128 人の女の子が兵糧<sup>ひょうりょう</sup>として与えられています。一人に対し一人という  
129 ことで、その女の子は「花嫁」と呼ばれているんですけど…」

130  
131 雪音 「え…？ つまり、衣路は吸血できずにお腹がベコベコで、敵を仕  
132 留め損なつたと…？」

133 「いや……、あ…はい」

134 「(苦笑) あははは…」

135 「…あのね、衣路。あなたが吸血が苦手なのは知っているけれど、  
136 空腹で任務に支障をきたすって、どういうことよ。体調管理だつて  
137 大事な任務のひとつなのよ？」

138 「いや、そうなんだが…」

139 「まあまあ、先輩。…えっと、でも、三日も吸血してないって…」

140 衣路ちゃんの方は大丈夫なの？」

141 「あ、ああ大丈夫だ！ さっきは油断したからであつ…」

142  
143 ぐうーつとお腹の音。

144  
145 「(はずかしそうに) く…」

146 「もう！ 衣路ちゃん、全然大丈夫じゃないよ！ 私、すっごく心  
147 配してるんだからね？」

148 「っ、蒼緒。……すまん」

149 「で…喧嘩の理由は何？」

150 「へ？ あ…いや…、別になんでもー」

5

151 雪音 「誤魔化さないの」

152 「…はい」

153 「…あのね。べ、別に喧嘩とかじゃないんだけど、この間吸血した  
154 時に、ちよつと傷がついちゃって。私は全然いいよ、平気だよって  
155 言っただけど、衣路ちゃんが遠慮しちゃって…」

156 「(呆れて) …はい？」

157 「だ、だつて女の子の体だぞ？ それを…痛い思いをさせた上に、  
158 傷までつけるなんて、私は…」

159 「うーん、衣路ちゃんも女の子だと思っただけど…」

160 「私はヴァンプドールだし、傷だつてさつさと治るからいいんだよ。  
161 さっきの傷だつて、もう痛くないし。でも蒼緒は普通の女の子だし」

162 「そういうのを過保護って言うのよ。…でもそういえば衣路って、  
163 蒼緒が傷つくのをすごく嫌がるわよね」

164 「だつて普通に痛いとかやだろ？」

165 「痛いつて言つても、ちよつとだけだし、傷だつてちっちゃいのだ  
166 よ？」

167 「……えっと、蒼緒ちゃん、聞いていいかな？ 傷つて今は…」

168 「もうぜーんぜん。なんにもないよ？ ほら！」

169 「綺麗なものね」

170 「アトすらないね…」

171 「いやでもあの時はすっごい血が出たな…、うわ、思い出した  
172 けでつらくなつてくる…！」

173 「(ため息) 大袈裟ねえ…。まあ、でも、蒼緒たちって確か小さい  
174 頃にウェアウルフに襲われて、大怪我したんだっかしら？ トラ  
175 ウマと言うこと？」

176 「うん。結局は軍人さんに助けてもらったんだけどね、たぶん」

177 「たぶんって…？」

178 「私も衣路ちゃんも気を失っちゃってたから。んー…そのせいか  
179 ね。衣路ちゃんが私を痛がらせたくないのつて」

180 「そうなの？ 衣路ちゃん」

紗凧

6



181 衣路 「え？ だろう。そうかな。ただもう蒼緒が痛い思いするのが  
 182 嫌で嫌でたまらなく嫌なんだよ！」  
 183 雪音 「重症ね」  
 184 紗凧 「過保護だね」  
 185 蒼緒 「あははは…。(のろけつぽく) でもそこが衣路ちゃんの優しいと  
 186 ころっていうか…」  
 187 雪音 「はいはい、過保護なだけよ。…それでその程度の怪我でどうして  
 188 三日も断食なんてしているの？」  
 189 衣路 「は？ だってかわいそうだろう！ あ、あと……(小声で) はず  
 190 かしいし」  
 191 雪音 「は？」  
 192 衣路 「いや、あの……(小声で) はずかしいし」  
 193 雪音 「……あなたが恐ろしくくらいに蒼緒を大事にしているのはわかつ  
 194 たわ。けれど、さすがにその程度で三日も断食して任務に支障をき  
 195 たすのはどうかと思うわね。あと恥ずかしいって言った？ 言った  
 196 わね？」  
 197 衣路 「いや…あの…」  
 198 雪音 「蒼緒はあなたの花嫁でしょう。はずかしいってどういうことよ」  
 199 衣路 「いや、ほら、こう…密着、する、だろ。血で汚さないように、服  
 200 も脱ぐし…なんか…」  
 201 雪音 「はあ？ あなたヴァンプドールでしょう？」  
 202 紗凧 「ま…まあまあ先輩。最初は僕も恥ずかしかった…し。えっと、蒼  
 203 緒ちゃん、衣路ちゃんの花嫁になってどのくらい、かな？」  
 204 蒼緒 「ええっ？ あ、えと、は…半年、かな」  
 205 雪音 「…ちょっと。半年間もあなたたち、吸血するだけでこんなふう  
 206 もだもだもだもだやってるの？」  
 207 蒼緒 「もだもだっていうか…(衣路に) ねえ」  
 208 衣路 「(蒼緒に)…なあ」  
 209 雪音 「あももう、めんどくさい！ というわけで、」  
 210 衣路 「ん？」



211 雪音 「今ここで、吸血なさい」  
 212 衣路 「ああうん、今ここできゅうけーは？ ここで吸血!?」  
 213 雪音 「そうよ。だってあなたお腹が空いているんでしょう？ だったら  
 214 吸いなさい。ヴァンプドールらしく堂々と！」  
 215 衣路 「いやいやいや！ いつ吸おうが私の勝手だろう？」  
 216  
 217 と、タイミングよくお腹の音が鳴る。  
 218  
 219 衣路 「うぐっ…」  
 220 雪音 「あらあら、その空腹のせいで、大切な同僚を戦闘に巻き込みこん  
 221 だのはどこの誰だったかしら？」  
 222 衣路 「だいぶ楽しそうに参戦してたけどな」  
 223 雪音 「おだまりなさい。とにかくあなたがそんな意気地のないヴァンプ  
 224 ドールだから同僚を危険にさらすんです。あなたのヘタレ…もとい、  
 225 その吸血恐怖症、今すぐ治しなさい！」  
 226 衣路 「はああああ？」  
 227 紗凧 「あ…ごめんね、蒼緒ちゃん。先輩言い出すときかないから…」  
 228 蒼緒 「って紗凧ちゃんまで!?」  
 229 紗凧 「僕も、血は…吸えた方がいいかなって思うし」  
 230 蒼緒 「ええええええ！」  
 231 雪音 「さあ！ 吸いなさい、このみやいあさい二ノ宮衣路大尉！」  
 232 衣路 「いやいやいや！ 今ここでって…、後で！ 後でちゃんと吸うか  
 233 らー！」  
 234 雪音 「いいえ、だめよ！ そんな及び腰だからいつまでもまともに吸血  
 235 のひとつもできないのよ。吸いなさい」  
 236 蒼緒 「ゆ、雪音さん、私が責任を持ってあとで吸わせますから…」  
 237 雪音 「いいえだめよ。軍人たるもの退けない時、退いてはいけない時が  
 238 あるの！ さあ、お吸いなさい！ 進軍あるのみよ！」  
 239 衣路 「……っ」  
 240 蒼緒 「……っ。あのお…、雪音さん」

241 雪音 「なにかしら、篠蔵蒼緒中尉。反論は認めなくてよ」  
 242 蒼緒 「い、いえ、反論というか…、で、では、お二人にお手本を見せて  
 243 いただけないかなあと…」  
 244 衣路 「はあ!? 蒼緒、何言って…」  
 245 紗凧 「あ、蒼緒ちゃん!?」  
 246 蒼緒 「（ひそひそ声で衣路に）でないと吸わされちゃうんだよ! 二人  
 247 の目の前で…」  
 248 衣路 「（ひそひそ）だ、だが、そんな時間稼ぎにしかないし、ど  
 249 つちにしたらって私たちだって吸わされ…」  
 250 蒼緒 「（ひそひそ）その間になんとか逃げるんだよ、衣路ちゃん」  
 251 衣路 「（ひそひそ）そうか…! そうしよう、蒼緒」  
 252 雪音 「お手本…?」  
 253 蒼緒 「そうですね! ヴァンプドールとして、そして優秀な軍人  
 254 の先輩として、ぜひとも花纏大尉と白藤中尉にお手本を…」  
 255 雪音 「まあ? 確かに? 私たちが優秀な軍人というのは間違いないわ  
 256 ね。紗凧は少し気が弱いところがあるけれど、でもとても芯はしつ  
 257 かりしているし、手本になるところは多い…。何よりとても可愛ら  
 258 しいわ!」  
 259 衣路 「それ軍人に関係あるか?」  
 260 雪音 「（食い気味に）いいでしょう! あなたたちにヴァンプドールら  
 261 しい吸血をお見せするわ!」  
 262 紗凧 「せせせ先輩っ!?」  
 263 雪音 「さあ紗凧、こっちへいらっしやい」  
 264 紗凧 「……っ、だ、だめですよ。きゅ、吸血を見せるだなんて…は、恥  
 265 ずかしい、です…僕…」  
 266 雪音 「あら、照れているの? ふふ、そんなところも可愛いわ、私の紗  
 267 凧…」  
 268 紗凧 「っ、だめですってば、先輩。あ…」  
 269  
 270  
 270 引き寄せられる紗凧。

9

271  
 272 雪音 「（耳元で囁くように）紗凧は…見られるのが恥ずかしいの?」  
 273 紗凧 「っ、あ、当たり前…です。せ、先輩は美人だし目立つ人だから、  
 274 人に見られるのも慣れてるかもしれないけど、僕は…地味…だし。  
 275 全然…可愛くもないし」  
 276 雪音 「あら、紗凧はとっても可愛いわ。大きな瞳もやわらかいほっぺも、  
 277 この、桜色の唇も…ね?」  
 278 紗凧 「っ、先輩…」  
 279 雪音 「紗凧…」  
 280  
 281 見つめあつて、いい雰囲気。  
 282 ーが、雪音、衣路と蒼緒を振り返り、微笑を浮かべて。  
 283  
 284 雪音 「ちなみに逃げるような真似をしたら、逃亡犯として私が責任をも  
 285 って衣路を処刑してあげるから、覚悟なさいね」  
 286 衣路・蒼緒「ひっ」  
 287  
 288 雪音、紗凧を抱き寄せる。  
 289  
 290 雪音 「紗凧…」  
 291  
 292 紗凧のコートを脱がせる雪音。  
 293  
 294 紗凧 「あ…先輩…っ。だめ…ですって。…ふたりが、見てるし…」  
 295 雪音 「大丈夫。すぐに気にならなくしてあげる。…ね?」  
 296 紗凧 「あっ」  
 297  
 298 軍服の上着のボタンを3つほど外す音。首筋あたりに優しく触れる  
 299 雪音。  
 300



301 紗凧 「んっ。だめ…っ、です、せんば…あつ」  
 302 雪音 「ふふ、紗凧…」

304 紗凧の腰を抱く雪音。

306 雪音 「紗凧…（首筋にキス、リップ音）」

307 紗凧 「んっ…！っ、先輩…っ、せんば…っ、だめ…っ」

308 雪音 「…ふふ、ほんとうに、だめ？ 紗凧は…いやなの？」

309 紗凧 「っ、い、いやじゃ、…ない、けど、でも…っ」

310 雪音 「紗凧…」

312 ーと、衣路、恥ずかしさのあまり立ち上がって

314 衣路 「んあーっ！だめだつ！こ、これより帰投する…っ！」

315 蒼緒 「い、衣路ちゃん!?」

316 衣路 「うわあーん！」

317 蒼緒 「ま、待ってよー！」

319 逃げ帰る衣路、蒼緒。

321 雪音 「ちっ、逃げたわね…」

322 紗凧 「あ…っ。…行っちゃった」

323 雪音 「まったく、純情にもほどがあるんだから。吸血できないってどういう事よ」

325 紗凧 「まあ、二人は幼馴染みだったって言うから、ちょっと照れちゃうんじゃないかな。でも…、せ、先輩、ほ、ほんとに二人の前で吸血

326 するつもりだったの…？」

327 雪音 「するわけじゃないでしょう？ 発破をかけただけよ」

328 紗凧 「よ、良かった」

329 雪音 「…でも、ごめんなさい、紗凧。私、いつもあなたを困らせてしま

331 つて…」

332 紗凧 「ううん、いいんだ。僕も、本当は先輩が優しいこと、知ってるし。それにあのままだとふたりともかわいそうだし、ね」

333 「ええ、そうね。一体どうしたものかしら…。…ま、二人のことはともかく、ありがとう、紗凧。…好きよ」

336 紗凧 「…僕も、先輩が好き、だよ。僕、先輩の花嫁になれて、本当に幸せなんだ。だって…花嫁になったからこそ、先輩に世界一大事にされてるってわかるし…」

339 雪音 「紗凧…」

340 紗凧 「先輩…」

342 見つめあって。

344 雪音 「紗凧…（キス。リップ音）」

345 紗凧 「んっ、だ、だめです。…っ、続きは部屋に帰ってから…です」

346 雪音 「ふふ、そうね。でないと可愛い紗凧が風邪をひいてしまうものね」

347 紗凧 「…もうー」

348 ■第一話

349 ■兵舎。雪音の部屋（夜）

350 ノック音

351 「どうぞ」

352 ドアの開く音

353 「あら。いさぎよく自分から処刑されに来たのかしら？」 衣路

354 「…さつきは逃げて、悪かったよ、雪音」

355 バタンとドアが閉じる。

356 「いいのよ。私たちもからかうような真似をして悪かったわ。それで、どうかした？」

357 「いや、あの、紗凧は？」

358 「相談があるって、さつき蒼緒に呼ばれて行っただけど？」

359 「そうか」

360 「あら、なあに？ 紗凧には聞かれたくない話？」

361 「そういうわけじゃないが…。その…」

362 「ま、いいわ。その様子だと、あなたもなにか相談があるんでしょ？ とりあえず座ったら？」

363 「うん」

364 椅子（木製）を勧める雪音。

365 座る衣路。

366 「それで、どうかした？」

378 「あのさ、さつきの話…なんだけど」

379 「ああ、あなたの吸血恐怖症」

380 「いや、怖いわけじゃないんだよ。苦手っていうか」

381 「嫌ではないんでしょう？」

382 「うん。…嫌とかではない。だから私もこのままでいいとは思ってないし、どうしたら克服できるかな、って」

383 「それで私に相談に来たよ。…ふふ」

384 「…なんだよ？」

385 「だってあなたってあんまり人に頼ろうとしないから。嬉しくて、つゝ」

386 「……」

387 「それで、具体的にはどうしたいわけ？」

388 「…は、恥ずかしいように吸血するには、どうしたらいいんだ？ あと、どうしたら痛くないですむのか、とか…」

389 「……」

390 「なんだよ」

391 「いえ、そもそも恥ずかしいって、よくわからないのよね。むしろ恥ずかしがってる紗凧を可愛がったり焦らしたりするのがとても楽しそうっていうか」

392 「う、……マジか…」

393 「マジね。ふふ。まあ、生真面目な衣路らしいけど…。でも、蒼緒

394 「うん…。全然いいよ、って。私が吸いたい時にいつでも吸ってっ

395 て」

396 「あーら、うちそうさま」

397 「ん？ 雪音は吸血してないのに、なんでごちそうさまなんだ？」

398 「……っ。…にぶいわね…。いいわ、じゃあ聞くけど、衣路はどう

399 いうふうに恥ずかしいのかしら？」

400 「へあっ!? ど、どういうふうにつて…。なんか蒼緒とは幼なじみ

401 で子供の頃からずっと一緒にいたから、なんか照れくさいっていう

402 衣路



か。いざ吸おうとすると目が合わせられないっていうか」

「蒼緒のことは嫌いじゃないんでしょ？」

「当たり前だろー」

「じゃあ、蒼緒のどこが好き？」

「うええええ？」

「聞いたところによると、蒼緒はあなたの花嫁になるのを志願したんでしょ？　そしてあなたもそれを受け入れた。ヴァンプドールの花嫁というのは、今までの人生を捨てて、社会から隔絶されて軍隊の管轄下でのみ過ごすようになるから、並大抵の覚悟じゃなかったはずよ？」

「うん。蒼緒には感謝してる」

「感謝って…それだけ？　もしかして、志願してくれた事への負い目とか？」

「負い目なんかじゃない！　私は…」

「……」

「私は本当に…蒼緒が私の、は、花嫁になってくれて嬉しいんだ。吸血はちよつと、恥ずかしいけど…。でも、ヴァンプドールになっても私のそばにいてくれたのは蒼緒だから。だからこそ全力で蒼緒を守りたいと思ってるし、ずっと、私の花嫁でいて欲しいと思ってる…。大事な、親友だから」

「親友、ね」

「え？」

「いえ…じゃあ改めて聞けれど、蒼緒のどこが好き？」

「（照れて）ええっ！　…うーん、改めて聞かれるとわかんないけど…。ちっちゃい頃から、あいついつも笑ってて、私が悩んでてもいつも前向きだし、励ましてくれるし、背中を押してくれるのはあいつだし…。強いし。優しいし」

「顔だってまあ可愛いわよね」

「まあそれなりに可愛ーって、何言わせるんだよ、雪音！」

「ふふ、ごめんなさい。蒼緒のことになると一生懸命な衣路が可愛

くっ」

「もう！　人が真面目に相談してるっていうのに」

「私だって真面目よ？　衣路はヴァンプドールになってから、はじめての友人だもの…。人間だった頃、私をちゃやほやしていた人たちは一人残らずみんな私の元を離れたわ…。まあ、ヴァンプドールはみんな多かれ少なかれそうだけれど」

「……。…でもお前は…、家族に監禁されてたって…」

「名譽ある花總家に化け物などいないーってね。まあ結局は持て余して軍に捨てられたわけだけれど。おかげでだいぶ荒んだわね」

「雪音…」

「…いやだ、そんな顔しないで。過去の話よ…。でも、」

「紗凧に会って、私は変わる事ができた。紗凧の優しさのお陰で人を恨まずにいられた…」

「……雪音…」

「ヴァンプドールと花嫁の関係は、兵糧ひやうりやうだなんて押搦されて、確かに捕食関係にはあるけれど、それだけじゃない。命を預けあつて、命を与えるからこそ、ふたりだけの特別な絆がある。衣路と蒼緒、あなたたちだつてそうでしょ？」

「特別な絆…」

衣路、顔を上げて。

「そっだな」

「（楽しそうに）そ・れ・か・ら、痛みの少ない吸い方だけれどお

「お、おう！」

「吸血って確かに最初は痛いんだけど、痛みつて慣れるのよね」

「と、とは聞くが…？」

「まあ、痛み意外のことでまぎらわせてあげるといいうか」

「（恐る恐る）痛み…以外？」



雪音、純情な衣路をからかうように

「花嫁をいーっぱい可愛がつてあげて、気持ちよおく、心も体もリラックスさせてあげて…ね？ …わかるでしょ？」

「……っ！」

「ほら…衣路だって…蒼緒の事、大事なんでしょう？ 痛い思いさせたくないなら…ね？」

「（恥ずかしそうに）それは…そう、だが…。…き、気持ちよく、心も体もリラックスとは…具体的にどう…」

雪音、衣路に耳打ち。

「優しくキス…したりとか、あとは…（ひそひそ声）こしょこしょこしょ…」（なにかえつつなこと言っている）

「な……っ！」

オーバーヒートで衣路の頭からプシューッと湯気が。

「あらあら。ちよつとからかいすぎちゃったわね」

「雪音え…」

「でも」

「ん？」

雪音、衣路に向き直り、

「ねえ、衣路。いつも蒼緒が笑顔なのはどうしてだと思っ？ いつもあの子のそばにいたのは、誰なのかしらね？」

ドアが閉じる音。

■廊下

衣路 「蒼緒……私は…」

幼馴染みとしての友情と、今の自分の胸の中の気持ちに揺れる衣路。蒼緒のことは好きだけれど、友情としてで、恋愛感情ではない。でも蒼緒の事は誰よりも大事にしたいと思うが、それをうまく名言化できないもどかしさ。

■第三話

■同兵舎・中庭、ベンチ（夜）

507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536

蒼緒  
紗凧  
蒼緒  
「うわわわっ、お、大袈裟だなあ、蒼緒ちゃんは。…で、話って、やつぱり…、吸血のこと？」  
「うん…。私は衣路ちゃんに好きなときに、好きなように吸血してもらってかまわないんだけど、衣路ちゃんは抵抗あるみたいで…。私のこと、ほんとはいやなのかなあって…」  
「（即答して）いや、それはないと思うけど」  
「え？ そ、そうかな？」  
「うん。それに衣路ちゃんの性格からすると、好きでもない子を花嫁にはできないと思うなあ」  
「んー…そっか。そうだよな。でも…。私の好きと衣路ちゃんの好きは、全然違うから…」  
「蒼緒ちゃん…」  
「…好きって、何かな？ 私は、ただ、衣路ちゃんの支えにならなくて、花嫁になったはずなのに、いつの間にか、衣路ちゃんの特別になりたいって、思っちゃってる。…嫌なのにな、そんなの。…衣路ちゃんの負担になりたくないのに」  
「い、嫌なことなんかじゃないよ、そんなの」  
「で、紗凧ちゃん…」  
「誰かの特別になりたいって思うのは、だめなことなのかな？」  
「わ、わかんないけど。でも、少なくとも衣路ちゃんにとっては、

19

018



537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566

紗凧  
蒼緒  
「私は特別なんじゃないんだよ」  
「そんなことないよ。あんなに衣路ちゃん、蒼緒ちゃんのこと、大切に思ってるじゃないか！」  
「でも。私の特別とは、やつぱり違うよ。私の思う大切と衣路ちゃんの思う大切は同じじゃないもん」  
「……蒼緒ちゃん……」  
「最初は…ちっちゃい頃は、衣路ちゃんの隣にいらればよかったんだ。ずっとそう思ってた。…けど。衣路ちゃんがヴァンプドールだってわかって、衣路ちゃんを支えてあげたって思っ、花嫁になるって言っ、衣路ちゃんも受け入れてくれて。…でも、違ったの」  
「…違った？」  
「衣路ちゃんを支えてあげたからじゃなかった。ただ、本当は、衣路ちゃんがほかの誰かの血を吸うなんて嫌だったから。それに気づいた時、私ってすごくいやな子なんだって思った。全然、衣路ちゃんのためなんかじゃなかった…」  
「蒼緒ちゃん…」  
「それに私…花嫁になれば、衣路ちゃんの特別になれるんじゃないかって、どこかで期待してた…」  
「……。みんな…そうだよ。僕だって、もしも先輩が他の女の子の血を吸ったりしたら、…いやだよ。僕だって先輩の特別でいたいんだ。…そう思うのは、だめなことじゃ、ないよね？」  
「……………だめじゃないと思う。でも、…なんか、…なんでだろう。…苦しいよ。自分で選んだことなのに。自分で花嫁になったのに。…支えてあげたいって、思ってたはずなのに…」  
「……」  
「私、全然、思った通りの花嫁さんに…なれてないや。衣路ちゃんが好きはずなのに。……………好きって、…なんだろう」  
「蒼緒ちゃん…」

20

蒼緒、話題を変えるように。

「あのさ、紗凧ちゃんと雪音さんって…その、つ、付き合ってるんだよね？」

「え？ ええ？ ば、僕たちのこと？ …いや、…ええと、ええと…うん」

真つ赤になる、紗凧。

「いいなあ。…雪音さんって、美人だし軍の中でもファンがいっぱいいるし、素敵だもんね」

「うん…。先輩は完璧主義者だし、合理的で冷淡だって思われちゃう時もあるけど、でも本当は強がっているだけで、すっごく寂しがりやで甘えん坊で、…可愛いんだ」

「うわあ、めっちゃめちやのろけてる」

「え？ い、衣路ちゃんだって素敵でしょ」

「ええ？ まあ、エースって言われてるくらい強いし？ かっこいいし？ 雪音さんほどじゃないけど、ファンだっているし？ …まあ、雪音さんにはヘタレって言われちゃったけど」

「でもそういうところも好きなんですしょ？」

「……うん。…好き」

えへへ、と笑い合う二人。

「…どうしたら衣路ちゃん、血を吸ってくれるようになるのかな？」

「うーん、蒼緒ちゃんが痛い思いするのが嫌みただけど…」

「私は別に痛くてもいいんだけどなあ…。注射みたいなのだし。それに衣路ちゃんが吸ってくれるなら、痛いの、…気にならないし。…紗凧ちゃんは？ やっぱ痛い？」

「僕？ 僕も痛みはあんまり気にならない方、かなあ。それに、…

…っ、なんでもない」

「え？ なに？ 気になるじゃん。それに、なに？」

「え…。…それに、吸う時はいつも、先輩がいろいろ…して、くれるから」

「…っ！（恥ずかしいけど興味ありげに）…いい、いろいろ、って？」

「っ、…その、…き、キス、したり、とか、…いい、いろいろ！」

「きゃー！」

「……っ！ もう！ からかわないでよ！」

「からかってない、からかってないよ！ いいなあ、雪音さんとラブラブで」

「…っ、もう！」

「じゃあ、私が痛くなくなれば、衣路ちゃん、吸血してくれるかなあ」

「まあ、そうかな。…じゃあ、痛くないように衣路ちゃんになしてもらおう？」

「えー……！ そ、そんなの……き、キス、かな？」

「えー……！ あ、蒼緒ちゃんから、さ、誘うの？」

「えー……！ そんな私からとか無理だよ！ でも、でもね、実はね、一回だけ、キス、したことあって」

「えー……！ いつ？ いつ？ いついつ？」

「四日くらい前…。実は、武器科の椎衣那少佐にキスでもしてみたらいんじゃないかって言われて」

「あ…椎衣那少佐…。…それで、吸血できた？」

「それが…しようと思ったらタイミンが悪くて…」

「タイミン？」

「だ、大浴場だったから、紗凧ちゃんと雪音さんが入って来ちゃった…」

「え？ ええ？ あの時？ ごめん！ 全然わからなくて！」

「いや、わからなくて当然だよ…。で、そしたらさ、その後お互いになんか意識しちゃって、全然うまく吸血できなくて。遠慮する



627 から牙がうまく刺さなくなつて」  
 628 紗凧 「それで、怪我しちゃったの？」  
 629 蒼緒 「うん…」  
 630 紗凧 「それで衣路ちゃん、落ち込んでるんだ」  
 631 蒼緒 「うん…」  
 632 紗凧 「全然喧嘩じゃないね…」  
 633 蒼緒 「うん…。だから。謝るとかそういうのも違って、余計に気まずく  
 つつ」  
 634 「……」  
 635 紗凧 「……」  
 636 蒼緒 「……」  
 637 紗凧 「……あの、さ、もう一回、…キスしちゃえば、…いいんじゃない  
 かな？」  
 638 「へえええええ？ も、もう一回?! む、無理だよ。はじめてした  
 時だっていつぱいいつぱいだっただから！ もう一回とか無理無  
 理無理無理！」  
 640 「でも…衣路ちゃんもしてくれたんでしょ？」  
 641 紗凧 「それは、まあ、…そうだけど。でも…して、くれるかな？」  
 642 蒼緒 「…蒼緒ちゃんがしたいって言えば、衣路ちゃんならしてくれると  
 思うけど…」  
 643 「そ、それって、私から誘ってるみたいっていうか、誘ってるし…。  
 む…無理だよ。してくれるか、わかんないし」  
 644 「大丈夫だよ！ 衣路ちゃんだって吸わなくちゃとは思ってるみた  
 いだし、…ね！」  
 645 紗凧 「う、うん…。じゃあ、言ってみるけど…」  
 646 蒼緒 「蒼緒ちゃん、頑張つて！」  
 647 「うん…」  
 648 紗凧 「うん…」  
 649 蒼緒 「うん…」  
 650 紗凧 「うん…」  
 651 蒼緒 「うん…」  
 652 紗凧 「うん…」  
 653 蒼緒 「うん…」  
 654 紗凧 「うん…」  
 655 蒼緒 「うん…」  
 656 紗凧 「うん…」



657 蒼緒 「とは言ったものの…、キス…なんて無理だよ…。」  
 658 紗凧 「それに、なんか衣路ちゃんを騙すみたいで…。はあ」  
 659 蒼緒 「閉めたドアにもたれる蒼緒」  
 660 紗凧 「好きって…なんだろう。ちっちゃい頃は一緒にいるだけで楽しく  
 て、それだけで良かったのに…。花嫁になったのだって、ただ衣路  
 ちゃんを支えてあげただけなのに。それなのに今は…、花嫁  
 であれば衣路ちゃんの特別になれるかもって…期待して…。」  
 661 蒼緒 「花嫁だからって、全員がヴァンプドールの特別になれるわけじゃ  
 ないのに…」  
 662 紗凧 「涙ぐむ蒼緒。」  
 663 蒼緒 「ばかみたい。…はあ（ため息）」  
 664 紗凧 「そこへ足音。廊下の奥から衣路が。」  
 665 蒼緒 「蒼緒…？ どうかしたのか？」（蒼緒と鉢合わせして、動揺ぎみ）  
 666 紗凧 「い、衣路ちゃん！ な、なんでもないよ！ ちょっと、目にゴミ  
 が入っちゃつて」  
 667 蒼緒 「そ、そうか…取れたか？」  
 668 紗凧 「うん！ もう平気。えへ（笑って誤魔化す）」  
 669 蒼緒 「それなら…いいが…」  
 670 紗凧 「……」  
 671 蒼緒 「あの、蒼緒。ちょっと…いいか？」  
 672 紗凧 「え…？」

■第四話

■廊下（夜）

コツコツと廊下を歩く二人分の足音。  
ボタンとドアの閉まる音。

■兵舎・蒼緒と衣路の部屋

「い、衣路ちゃん、話つて、なに？」

「うん…」

「……」

お互いになんだか気まずい。

数歩歩いて、ベッドに腰掛ける衣路。

「あのさ、蒼緒——」

なにか言いかけるが、お腹の音が鳴る。

「う…」

「い、衣路ちゃん、お腹すいたよね。吸血する？　いいよ、私、痛いの平気だし！」

蒼緒、衣路の方へ向かって歩く。

「蒼緒」

衣路、蒼緒の手を取る。

「い、衣路ちゃん…？」

「今日は、ごめん。私のせいで、いろいろあって」

715 蒼緒

「い、衣路ちゃんのせいじゃないよ。誰でも苦手なことってあるし。あ、でも…これ以上吸血しないと良くないから、吸血して？」

「うん。だから……」

「…衣路、ちゃん？」

「だから、もし、蒼緒がいやじゃなければ、………キス、…しても、いいか？」

「（激しく動揺）ええええええ！」

「……っ」

「…あの、ど、…どうして？」

「その、…雪音が、花嫁をいっぱい可愛がれば、あまり痛まないし…。だから。せめて、キスだけでも…」

「あ…雪音さん…なるほど…」

「……いい、か？　蒼緒…」

「……」

ためらいながらも、ベッドに腰掛ける蒼緒。

「…衣路ちゃん…、ほんとに、するの？」

「蒼緒が…嫌じゃなければ…」

「……」

「…蒼緒…」

見つめあって甘い空気。

でも、蒼緒、それを断ち切るように。

「……。だめだよ、衣路ちゃん、無理しなくても。ほんととはしくないでしょ、キス」

「えっ…し、したくないわけじゃ。この間だって、した、し」

「でも、私は衣路ちゃんが望まないことはしたくないな。吸血だけはして欲しいけど」



745 衣路 「蒼緒…」  
746 蒼緒 「衣路ちゃん」  
747  
748 蒼緒がコートを脱ぐ音。  
749 上着のボタンを3つほど外す音。  
750  
751 蒼緒 「はい。…吸って？ いいから、痛くしても。衣路ちゃんの牙なら、  
752 衣路ちゃんなら…いいから。だって、私、衣路ちゃんの親友だもん」  
753 衣路 「……」  
754  
755 衣路、決意して。  
756  
757 衣路 「蒼緒。望んでないわけじゃ、ない。蒼緒に痛い思いをさせたくないのは本当だから。  
758  
759 だから、蒼緒を気持ちよくさせられるかは、わからないけど、私が  
760 ……したいんだ。だめかな？」  
761 蒼緒 「衣路ちゃん…」  
762  
763 蒼緒、衣路が同情込みで言っているのがわかる。でも嬉しい。複雑  
764 な心境。  
765  
766 蒼緒 「……。うん、（顔を上げて、衣路のためにわざと嬉しそうな演技）  
767 わかった」  
768 衣路 「蒼緒…」（緊張しつつもほっとしている）  
769 衣路 「じゃあ…、するから」  
770 蒼緒 「…うん…」  
771 衣路 「……。ほんとに、するから」  
772 蒼緒 「…うん」  
773 衣路 「……………（触れるだけのキス、リップ音）」  
774 蒼緒 「んっ…」



775 衣路 「（もう一度触れるだけのキス、リップ音）」  
776 蒼緒 「っ」  
777 衣路 「（囁いて）……。き、気持ちいいい？」  
778 蒼緒 「わ、わかんない…けど、……っ、ドキドキ…する」  
779 衣路 「蒼緒……。…（触れるだけのキス、リップ音）」  
780 蒼緒 「ん…っ」  
781  
782 お互い息を止めていたので、衣路、蒼緒、呼吸音。  
783  
784 衣路 「蒼緒…、私も、ドキドキ、……してる…」  
785 蒼緒 「うん…。……っ、いいよ、……吸って、衣路ちゃん」  
786  
787 蒼緒、ボタンをさらに3つほど、外す音。  
788  
789 衣路 「っ、蒼緒…」  
790  
791 ベッドが軋む音。  
792  
793 衣路 「（首筋に吸血。息）」（リップ音だと下品になるかもなので、息  
794 で）  
795 蒼緒 「んっ………！（牙、ちよつと痛い）ん…ん、……っ」  
796 衣路 「（吸血。息）」  
797 蒼緒 「ん……っ、衣路ちゃ…っ、ん、んっ」  
798  
799 蒼緒、思わず衣路を抱きしめる。（衣ずれの音）  
800  
801 蒼緒 「いぶき、ちゃ、…っ、ん、んん——っ」  
802  
803 吸血おわって。  
804 ベッドに倒れ込む蒼緒と衣路。



互いに囁き合う。(ビロートーク的な甘い感じに)

「ん…」

「(遠慮しがちに、心配そうに) …蒼緒、…痛かったか？」

「(貧血で少し疲れて気怠げに) ん…、大丈夫」

「…ほんとに？」

「…うん。…すぐく、ドキドキして、痛いって、思う間も…なかったかも…」(ほんとは痛かった。でも痛みとかどうでもいい)

「…そっか」

「衣路ちゃんは…？ お腹いっぱいになった？」

「…うん。なったよ」

「うそ。三日も吸ってなかったんだよ？ …遠慮、したでしょ？」

「……」

「…もう。いっぱい吸っていいのに。…あとでまた、吸って？」

「でも、」

「…じゃあ、痛くないように、またキスしてくれる？」

「……うん」

「(少し眠そうに) ふふ、今度は、いっぱい吸ってね？」

「…うん。貧血でだるいだろ。少し寝るか？」

「…うん。じゃあ、ちょっとだけ」

「ちよっと待つてろ」

ベッドの掛け布団をかける衣路。

「ほら。おやすみ、蒼緒」

「ありがと。…おやすみ、衣路ちゃん…」

「(寝息)」

「……おやすみ、蒼緒」

835 蒼緒 M 「こうして私たちは、ようやく吸血できたのです」

■第五話

■翌日夕方（夜行性の吸血鬼にとっては翌朝みたいな）

蒼緒・衣路の部屋。

カチコチ、古めかしい時計の音。

「（寝息）」

「（寝息）」

起床のラップ楽曲がスピーカーから流れる。（自衛隊のみたいな）

「ん…ん…。んー（寝たまま伸び）ふああ、よく寝た…って、

え、…えええええつ!?」

「（寝息）」

隣に衣路が寝ている。

「い…衣路ちゃん？ ななな、なんで私のベッドに…って、そっか、

ゆうべあの後、もう一回吸血したまま、寝ちゃったんだ！ てゆうか、

これ衣路ちゃんのベッドだし…」

「（寝息）」（起きない。寝起きは良くない方）

「……。そっか、私、衣路ちゃんと…き、キスして…それから…。え

へへ（思い出し照れ）。もうちょつと…、寝顔、見てたいな…。…ち

っちゃい頃は、こうしてよく一緒にお昼寝したんだけどな…。なんか、

むや〜ん」

「（寝息）…ん」（少し寝返り、でも起きない）

「ふふ…可愛い…。いーふーきーちゃん、夕方ですよ。ふふ」

素早いノック音。

開くドア。

焦り気味に部屋を覗き込む紗凧。

「蒼緒ちゃん、衣路ちゃん、起きてる!」

「あれ？ 紗凧ちゃん？」

「え？ なにのんびりしてるの！ 日夕点呼<sup>ひせいでんこ</sup>始まつちゃうよ!」

「へ？ にっせきてんこ…って、ええええ？ うわ、夕方!? 衣

路ちゃん起きて起きて起きて!」

「んあ…?」

「蒼緒ちゃん、早く早く!」

「早くって言っても、衣路ちゃんが…。衣路ちゃん、起きてよお!」

「んー…?」

足音。

紗凧の後ろから覗き込む雪音。

「紗凧、衣路たち起きーって、あらあら。ゆうべは思ってた以上に

仲良くしてたみたいね、お二人さん」

「雪音さん! ななな、仲良くなってる!」

「（寝ぼけて）んあ…あお…もうお腹いっぱい、飲めないよお…」

「いいい衣路ちゃん!?」

886 雪音 「あら、お腹いっぱいになるまで吸血するなんて……ち」

887 蒼緒 「ち、違います！ ……って、違うないけど、…ああ、もう、衣路ちゃん起きてよお！」

889 衣路 「おあ……？ あお……？ なんてあおがわたしのベッドに……って、蒼緒!?」

891 蒼緒 「……って、驚くのはいいから、起きて着替えてよお、衣路ちゃん！」

892 衣路 「んんん？ お、…おう！」

894 バタバタとベッドを飛び降りる二人。

895 衣類を手渡す蒼緒。

897 蒼緒 「衣路ちゃん、はい！ 上着とスカート！ あああとはい——」

898 衣路 「あ、ああ、ありがと。…あ、蒼緒、あのさ——」

899 蒼緒 「ええ？ 衣路ちゃんになにに！ 急いで！」

900 衣路 「点呼の後、ちよつといいか？」

901 蒼緒 「え？ うん……」

903 ■兵舎玄関付近

904 ざわめき。入り乱れる足音。

906 蒼緒 「点呼終わったけど……衣路ちゃん、どうかした？」

907 衣路 「いや、ちよつとこつちにきてくれるか？」

908 蒼緒 「うん……」

909

910

二人分の足音。

33

911

912 蒼緒 M 「衣路ちゃん……なんだろう、…真剣な顔して……」

913

914 足音止まってる。

915 ■ドアを開けて、どこかの小部屋に入る二人。

916 閉じられるドア。ざわめきが消えて二人きり。

917

918 衣路 「……あのさ、蒼緒」

919 蒼緒 「う、うん」

920 「……ゆうべは、ありがとう。吸血させてくれて。…おかげで、その、

921 お腹いっぱいになったし」(照れつつ)

922 蒼緒 「ああ、う、……うん」(思い出して照れつつ)

923 衣路 「……っ、そ、それでさ、改めて言っておこうと思って」

924 蒼緒 「……えっ」

925 衣路 「あのさ、昨日、雪音に言われたんだ。ヴァンプドールと花嫁は、

926 命を預けあって、命を与えるからこそ、ふたりだけの特別な絆があ

927 る、っつ」

928 蒼緒 「……とく、べつ……？」

929 衣路 「私は、……蒼緒が私の花嫁になってくれるって言ってくれた時、

930 本当は、すぐ迷ってたんだ。ヴァンプドールの花嫁になったら、

931 一生、蒼緒を縛り付けておくことになる。でも、断れなかった」

932 蒼緒 「……っ。…それって、私じゃ嫌だったって、こと？」

933 衣路 「違う。嬉しかったんだ。蒼緒が私の花嫁になるって言ってくれて。

934 嬉しいから、……断れなかった。蒼緒に、人間として普通の人生を

935 あげることができたのに。……できなかった」

34



936 蒼緒 「……」

937

938 頭を下げる衣路。

939

940 衣路 「だから、ごめん。……でも」

941

942 衣路、顔を上げて。

943

944 衣路 「蒼緒聞いて欲しい。私にはもう普通の人生はあげられないけど、

945 でも、できる事なら、蒼緒と特別な絆を築きたい、ヴァンブール

946 と花嫁として。私は、吸血もともにできないような半端なヴァン

947 ブドールだけど。でも、……一生、私が蒼緒を守るから。だから、

948 どうか、蒼緒、……これからも、私の花嫁でいてほしい！」

949 蒼緒 「……っ」

950

951 息を飲む蒼緒。

952

953 蒼緒 「…衣路ちゃんが言いたかったことって、それ？」

954 衣路 「…ああ」

955 蒼緒 「……っ、ばか衣路ちゃん」

956

957 衣路を抱きしめる蒼緒。

958

959 衣路 「あ、蒼緒っ！」（照れて驚きつつ）

960 蒼緒 「…もう、怖い顔してるから何かと思っただじゃない」



961 衣路 「ええ？ こ、怖かったか？」

962 蒼緒 「怖かったよ。…キスなんてしたから、私のことがいやになっちゃ

963 たのになって」

964 衣路 「いいい嫌になるわけないだろ！ 蒼緒は…、私の大事な花嫁なん

965 だから！」

966 蒼緒 「…ありがとう、衣路ちゃん。でも…気づいてる？」

967 衣路 「ん？」

968 蒼緒 「なんか、プロポーズみたいだったよ？」

969 衣路 「ええええええっ？ いや！ そいうつもりじゃ、いや、一生

970 かけて、守るつもりだけど…っ」

971 蒼緒 「……。うん。わかってる」

972

973 蒼緒 M 「…わかってるよ。私の特別と、衣路ちゃんの特別が、違うことな

974 んて」

975

976 衣路 「…蒼緒？」

977 蒼緒 「…ありがとう、衣路ちゃん。私を衣路ちゃんの花嫁にしてくれて」

978 衣路 「蒼緒…」

979

980 抱きしめ返す衣路。

981

982 衣路 「うん…。ありがとう」

983

984 蒼緒 M 「帝国陸軍特務機攻部隊はウェアウルフを殲滅するために組織され

985 た部隊です。」

986 そのためヴァンプドールの少女が集められました。ヴァンプドールは生まれた時はふつうの女の子です。

987

988 でも大きくなると、牙などの特徴が現れ、覚醒すると人間の世界では生きていけないので、軍隊に集められます。そして、野犬殺し——

989 ストレイ・ドッグ・カーネイジとして闘わされるのです。その兵糧ひょうりやうとして集められた少女は花嫁と呼ばれます。ひとりのヴァンプドールにひとりの花嫁が与えられます」

990

991

992

993

994 蒼緒 M ひんぎょう 「つまり私は兵糧ひんぎょうです。でも——彼女が私を特別と呼んでくれるのなら、私はきつと、…幸せです。だって私は、衣路ちゃんの花嫁だから」(複雑な蒼緒)

995

996

997

998 蒼緒 M 「…きつと、衣路ちゃんの特別と、私の特別は…違うけれど」

999

1000 (END)

# 吸血鬼の花嫁

— ヴァンブドールのはなよめ —

*A bride who gets married to vampire*

## DRAMA CD

© Saku Takano Pictures  
A bride who gets married to vampire

〈ドラマCD アフレコ台本〉

2021年11月1日発行

発行 嵩乃朔/Waterfall

s.takano.wf@gmail.com

[https://twitter.com/takano\\_wf](https://twitter.com/takano_wf)

<http://www.pixiv.net/member.php?id=2675148>

印刷所 株式会社栄光

ロゴデザイン 朔田フトシ様





# 吸血鬼の花嫁

— ヴァンプドールのはなよめ —

*A bride who gets married to vampire*

## DRAMA CD

*Saku Takano Presents*  
*A bride who gets married to vampire*

〈ドラマ CD アフレコ台本〉

非売品

A bride who gets married to vampire